

同じはずの、

晴れわたった青空を見上げるのが好きだ。
「今日もこの空には戦闘機は飛ばない」
飛んでほしいわけではない。
「飛んでほしいわけではない」という思いは同じ、
沖縄の人たちの真上には、今日も明日も戦闘機が飛ぶ。

私が住む場所には、生まれたときから基地がなく、
沖縄には生まれたときから米軍基地がある。

この沖縄の「現実」が、
日本「本土」に住む私たちが基地を押しつけている結果だとしたら、
どうだろうか・・・

これまでの歴史が示すように、沖縄の人たちは諸手をあげて基地を歓迎してきたわけでは決してない。
近年で言えば、オスプレイの配備、高江のヘリパッド建設、辺野古の新基地建設に対して
ずっと反対の声をあげ続けている。

辺野古の基地建設に関しては、世論調査でも 8 割近い反対が表明され続け、
各選挙（名護市長選、県議選、衆参両院選など）でも辺野古移設反対の民意が示され続け、
普天間基地の県外移設を掲げる翁長県政を支えている。

これだけ長年、強く反対し続ける沖縄に対して、
国が立ち足はだかり、あらゆる手段で辺野古の工事を進めようとしている。
他の地域では考えられない事ではないか。

これを多くの日本人は止めないでいる。
止めないでいるばかりか、辺野古に移設すべきだという世論が
移設反対を上回っているというデータさえ出ている。（2017年5月15日 NHK世論調査）
そして、8割を超える人たちが米軍基地を置く根拠となっている
日米安保条約（体制）が必要だと言いながら、基地の負担を負わず、
沖縄にそのしわ寄せがいくことを容認し、支持している。

これは政府だけの問題ではなく、それを支えている市民一人ひとりが
沖縄にふるっている暴力、差別ではないのか。

現在、政府が沖縄に対して行っていることは、
「国民主権・基本的人権の尊重・平和主義」を掲げる憲法から見て、どう映るのか。
そこに私たち市民はどのように関係していて、
この事態を止めるために、何をすべきなのか・・・
私たちのこれからの道筋をつくっていく、
議論を、行動を起こしたいと思う。

